

連体修飾マーカー“之”の韻律的特徴

——改良的文言における日化現象の視野から——

王 韻 清

Prosodic Features of the Attributive Marker “之 Zhi”:
From the Perspective of Japanization in the Improved Classical Chinese

WANG Yunqing

Abstract:

This paper shows that there is still a lack of research on the Indo-Europeanization of the Classical Chinese through language contact, and there is room for deepening the analysis of the Japanization of the grammar. In addition, considering the sentences in the Qingyibao cited by Keishuu Sanetou as examples, it is considered that the Japanese translations in the Meiji period influenced the style of modern Chinese to some extent, which is represented by the improved classical Chinese style. This paper compares the number of syllables of the central word connected to the attributive marker “之 Zhi” in the Jia Ren Qi Yu and Xin Min Shuo with “zhi” in modern Chinese and classical Chinese. The Chinese-style sentences represented by Kajin no Kigu written by Sanshi Tokai (Shiro Shiba) influenced the improved classical Chinese. We concluded that, although it was an indirect influence of Japanese loanwords, it disrupted the prosody of the central word in the attributive phrase of “之 Zhi”.

Keywords: improved classical Chinese; Liang Qichao; Kanbun Kundoku style;
Jia Ren Qi Yu; Europeanized grammar

キーワード：改良的文言 梁啓超 漢文訓読体 佳人奇遇 欧化文法

はじめに

近年、中国語以外の言語と中国語との言語接触から、中国語に多くの変化が生じたという研究は、多方面から研究されている。王奇生（2008: 56）の統計によれば、1886-1911年の間に翻訳によって日本から中国に伝わった社会科学分野の書籍は374部、1911-1937年の間にその数は急増し、1006部までにのぼっている。ここから外国語の中国語への影響を考えた場合、日本語からの影響は決して否定できる要素

ではないと考えられる。実際に語彙レベルでは多くの影響を受けていることがこれまでの研究で明らかにされている。しかし、中国語の「欧化」を考える際、多くは欧文からの文法的な影響を論じるものが多く、日本語からの影響はあまり論じられていない。しかし、上記の言語接触から考えると日本語からの影響について考察する余地は大いに残されていると考える。

本論ではまず中国語の「欧化」文法がどのように論じられていたかを説明し、それから「日化」現象の要素について具体例を提示しつつ分析する。以下ではまず中国語文法の「欧化」現象への考察に対し、どのような問題があるのかをまとめる。次に「日化」現象に関する先行研究をまとめ、明治初期の柴四朗による漢文訓読体の小説『佳人之奇遇』と、その中国語翻訳版である《佳人奇遇》(1947年、中華書局刊)と梁啓超《新民説における連体修飾マーカー“之”の用法を比較し、日本語の漢文訓読体から翻訳された中国語の作品が文法面でどのような影響を及ぼしたのかを考察する。

一 「日化」現象の要素

1919年、傅斯年是《新潮》雑誌に《怎樣做白話文》という文章を発表し、“白話必不能避免‘欧化’，只有欧化的白话才能够应付新时代的需要”と主張した。「欧化」現象が生じた原因について、王力はこのように述べている。

民国时期，有些留学生自著的书和自撰的文章，实际上也是大部分根据西文书籍；有时不免把西书整段地逐字照抄下来。只是不会声明是译文而已（王力 1985: 363）。

王力（1984: 433）によれば、「欧化」は現代中国語が印欧言語に影響されて生じて発展してきた言語現象、欧化語彙と欧化文法とも含む。王力（1985: 334）は“所谓的欧化，大致就是英化”と述べた。以降、欧化をほぼ英化と同一視されるようになってきた傾向となっていた。例えば、賀陽（2008: 27-28）は欧化文法現象が主に現代中国語が印欧語、とりわけ英語から影響されたものであり、印欧語を模倣することによって新興文法的要素や構文が生じた現象や、中国語でめったに使わなかった文法が印欧語の影響を受けてはじめて盛んに使われた現象などであると論じた。賀陽は現代中国語における欧化現象への考察をさらに深化させ、欧文の外来要素の他に、中国語の固有用法がいったん衰えるも翻訳活動によって活性化する要素もその一部と指摘した。

しかしながら、翻訳の源とされる「欧化」はすべてが欧文からの影響ではなく、日本語の文章からの影響もないがしろにしてはならないと考えられる。賀陽（2008）の観点に対し、陳力衛は以下のように指摘している。

贺阳的近著《现代汉语欧化语法现象研究》（2008）也是从来华传教士的文体直接跳到新文化运动的胡适那里，就好像汉语近代文体的形成就只有来自西语的欧化这一条线似的。但是，我们知道这种思路的展开从文化交流史上来说是有点问题的，即中日之间的近代交流这一环完全被忽略了，其语言间的相互影响也完全被掩盖了。这样就出现了一个问题：所谓欧化现象有多少是直接来自英文的，还

有多少是经过日文转述的，当然还有哪些实际上是直接来自日文的？这三种渠道应该分别阐述才好，特别是后两种，早应引起我们的注意（陳力衛 2011: 43）。

日本語の存在を無視して「欧化」を論ずる方法に対し、疑義を呈する学者はほかもいる。例えば、陳彪（2017）が現代中国語における欧化現象と日本語における欧化現象をそれぞれリストにして対照した結果、複音節語彙の増加、介詞が多用されること、修飾語の複雑化などと、両者に共通点が数多くあるという結論を得ている。

中国語が日本語から受けた影響、いわゆる「日化」をないがしろにする原因は何か。沈国威（2011: 147）は以下のように指摘する。

一、从语言形态论上看，汉语是SVO型语言，而日语则是SOV型，分别属于不同的语系，完全是异质的语言，故产生影响的可能性较小。二、中国需要吸收的是西方的新知识，而不是日本的知识。

つまり、SVO型の言語である中国語と英語に対し、SOV型である日本語は語順のうえで異なるだけでなく、語族も異なることで完全に異質な言語であると見做されたことや、中国が吸収しようとしたのは西洋の知識であり、日本の知識ではなかったことを挙げている。

「欧化」現象と同じく、「日化」現象は語彙の範囲にとどまらず、文法にも及ぶ。“关于”を例にとり、王力（1943: 359）はそれが五四運動以来英訳によって生じた語彙であると見なし、白話には英語の介詞に似たような表現がなく、動詞“关”と介詞“于”を組み合わせて対訳するわけと推測した。それを踏まえ、賀陽（2008: 118）はこのように論じる。

如果这一介词不是通过模仿外语介词用法产生的，而是汉语自身发展出来的，那么最有可能是从意义相近的动介词组‘关于’发展演化而来，而一个动介词组要演化为一个介词，需要经过词化和语法化的过程，这应该是一个渐变的过程，不会在一个很短的时间内完成，但我们并没有发现动介词组‘关于’曾经历过这样一个过程。如果我们认为介词‘关于’与动介词组‘关于’有关，那么印欧语言影响的作用就在于使这一动介词组跳过词化和语法化的过程而直接转化为语法标记。

原理的にはその可能性が十分あるであろう。ただ、“关于”などの介詞ははたして印欧言語の影響で生まれたと断言できるか否かはなお検討の余地がある。陳力衛はこの点について以下のように論じる。

本来日本人通过汉文训读吸收了一整套中文的语法句式，形成了所谓日语中的汉文体的表达方式……（中略）可是，当中国人在近代接触到日语时，正因为有汉文做基础，他们学习和掌握日语并不感到吃力。只是在遇到类似中文的表达形式时，他们无法原模原样地延用古典中文的表现形式，必须重新译作现代文才能运用到中文里去。这样一来就把这类汉文体的表达方式译成了一种新的形式，对现代中文来说等于是新增加了多种虚词表达的词语和句式（陳力衛 2005: 330-331）。

さらに、同（2005: 331）は“关于”を含めた日本語から翻訳した中国語の複音節語を一部挙げた：

～とみとめる	認可 / 許可 / 裁可
～とする	認爲
～として	做爲
～にたいして	對於
～にかんして	關於
～をもって～とす	以爲

複音節語が夥しくあらわれた原因について、陳力衛は日本人がかつて漢文を漢文訓読で理解した頃、漢文の虚字に工夫をこらして訓読法をまとめたことを指摘している。それが近代に入って、中国人が日本語で定着した表現を翻訳する際に、再び複音節虚詞をつくらざるを得なくなったと解釈した。陳彪（2017: 12-13）もこの意見に同意し、“日本在翻译西书时惯用‘训读法’，西方的语法结构先被转化为夹杂汉字的日语语法结构里、然后再被略作改动移植到汉语中，是非常有可能的”と述べた。日本語の「に對して」「に關して」に対応する“对于”“关于”という中国語の表現に対し、陳彪はこうした言語現象が単なる偶然ではないと推測し、“英化”文法から実際に日本語より直接的な影響を受けた文型を一部明らかにした。

こうした日本語からの影響を論じる論考が数多く存在するのみならず、フランス語、ロシア語、ドイツ語、ラテン語などが中国語にある程度影響を与えたという論証も少なくない。よって、「欧化」という概念は曖昧なまま、先行研究で統一されずに用いられているという傾向もみてとれる。一部の学者は「欧化」の代わりに“西化”“外化”“洋化”という用語を使う。また“日化”“俄化”“法化”という“言語+化”という形で外国語の影響を細分化する学者もいる。例えば、謝明鏡（2015）は“外化”という概念を挙げている。“外”とは漢民族言語（漢語）以外の言語を指す。ただし、外国語が中国語に与える影響を一般化して「欧化」と称するのがほとんどである。李春陽（2014）、徐時儀（2018）、刁晏斌（2019）などがその例である。本論は、清末中国知識人の翻訳活動という歴史的背景に基づき、英語を主とする欧文の中から日本語が中国語に与える影響を区別する必要があるという観点を踏まえ、「欧化」は日本語以外の外国語（字面どおりの意味を取り、「欧」はとりわけ西洋語を指す）が中国語に与える影響を指し、「日化」（日本語が中国語に与える影響）という概念と分けて定義し、考察を進めていく。

総じていえば、「日化」はおよそ二種類があるとみられる。第一に、「欧化」にかくれた「日化」現象、換言すれば、欧文からの直接的な影響ではなく、日本語における欧化現象を経由して中国語の欧化現象が形成されることを指す。「欧化」をいっそう細分化にし、その中から「日化」要素を分離して考察を深化させる必要があると考えられる。第二、日本語の翻訳作品を通じて日本語が直に中国語に与える影響である。欧化現象に関する研究が進展するなか、欧化の定義を明確化し、欧化に隠れた「日化」を顕在化させ、二者の区別および研究を深化する必要がある。

二 “新民体”における日化現象

1899年以降、梁啓超は“詩界革命”“小説界革命”“文界革命”を唱え、日本の政治小説、科学小説、冒険小説を手本として“新民体”¹⁾と呼ばれる独自の文体を完成させた。“新民体”という文体に対し、“突破文言旧格局的急先锋”（周光慶 2001: 217）とまで評価された。“新民体”の言語特徴を梁啓超自身は“時雜以俚語、韻語及外国語法”（時々俚語、韻語および外国の語法を混用する）と述べた。胡全章、関愛和は“新民体”の特徴をさらにこのように分析した。

梁啓超新文体改良の努力、首先体现为浅近化、白话化与不避骈偶的语言表达，以及平易畅达、酣放淋漓的文体风格。从语体层面考察，主要表现有三：其一是从众向俗，为文尽量运用浅近易懂而非艰涩生僻的文言语汇；其二是向俚语开放，吸收谚语、俗语、成语等白话成分，拉近言文之间的距离；其三是**不避骈偶**，吸收双声叠韵语汇，融会骈文时文的偶句排句，增强音韵之美、节奏之感与整饬之气。从文体层面考察，主要是语言浅近、表达明白所带来的平易畅达的阅读效果，杂以俚语隽语所造成的活泼跳脱的文风，运用韵语、排比语、偶句所带来的声韵铿锵之调、慷慨淋漓之气与往复顿挫之效。加上作者以情感之笔说理叙事的写作风格，纵笔所至不检束的自由书写理念，使梁啓超新文体具备了极强的表现力、极大的容量与自由度（胡全章、関愛和 2018: 163-164）。

総じていえば、“新民体”という文体の特徴に対する分析はほとんど語彙と文章の風格に集中している。一方、梁啓超自身が言及した“外国語法”の混用はとかく「欧化」文法とみなされる。たとえば、劉興忠（2021: 34-42）は“新民体”という“異質文言”の語彙と文法を対照に考察し、特に文法の側面から、「前者／後者」「關於」「於／在 X 之下」といった表現を挙げた。とりわけ「於／在 X 之下」という表現について、陳彪（2007: 137-147）の観点をまとめて同時に英語と日本語の欧化現象に影響されたと推測した。

実際、実藤恵秀は早くから“新民体”が「日本化文体」であることを明らかにした。ここにいう「日本化文体」が「日化」とでもいうべきであろう。以下、実藤恵秀が挙げた例を引用する。

某頓首，上書於最敬最愛之中国将来主人翁留学生諸君閣下。某聞人各有天職，天職不尽，則人格消亡。今日所急欲提問於諸君者，則諸君天職何在之一問題是也。

有一人之報，有一党之報，有一国之報，有世界之報。以一人或一公司之利益為目的者，一人之報也。以一党之利益為目的者，一党之報也。以国民之利益為目的者，一国之報也。以全世界人類之利益為目的者，世界之報也。中国昔雖有一人之報，而無一党報，一國報，世界報。日本今有一人報，一党報，一國報，而無世界報。若前之時務報知新報者。殆脱一人報之範圍也。敢問清議報於此四者中，位置何等乎。曰，在党報与國報之間。今以何祝之。曰，祝其全脱離一党報之範圍，而進入於一國報之範圍，且更努力漸進以達於世界報之範圍。乃為祝曰，報兮報兮，君之生涯，亘兩周兮，君之

1) 梁啓超の文体はほかに“新文体”“啓超体”などとも呼ばれているが、本論文で統一して“新民体”と称する。

声塵，徧五洲兮，君之責任，重且邁，君其自愛，罔俾羞兮，祝君永年，与国民同体兮，重視曰，清議報萬歲，中国各報館萬歲，中国萬歲（実藤恵秀 1970: 343）。

さらに、実藤恵秀（1970: 343）は「かれの文章は、日本語彙をとりいれただけでなく、日本文脈をとりいれた」と評価し、例の下線部を漠然と「日本化文体」の特徴とし、実藤（1970: 343）の注において、当時（清末）にとどまらず、「胡適、毛沢東、郭沫若も若いころは梁啓超の文章に魅せられた」、しかも「陳独秀が《新青年》に書いている文体は梁啓超式である」と補説した。ほかに、鄒容の小冊子《革命軍》の文体と風格は、紛れもなく梁啓超の“新民体”の深く影響されたものとされる。こうしてみれば、“新民体”の影響は民国以降にまで及ぼしているといっても過言ではなかろう。

梁啓超は文言の近代化と白話化を促した先駆者であり、そのために、新民体という文体を考案し実際に使用した。ここでは近代中国語の書き言葉をその言語的特徴から分析する。「日化」と判断できるのはやはり日本語に影響された言語特徴があるのを前提とするのがもちろんのことではあるが、中国語固有の表現でもなく「欧化」でもなく「日化」であることを判断する基準は何なのか、如何に基準を定めるかなどは今後の論文で深化させたい。

三 連体修飾マーカー“之”

前節で、実藤恵秀が挙げた例を「日本化文体」とし、翻訳を通じて日本語が“新民体”に影響を与えた可能性があることを指摘していることを確認した。しかし、これはいまだ実証を経ていない。加えて、「日本化文体」とは具体的にどのようなものなのかは明らかにされていないため、本章では下線部その一、連体修飾マーカー“之”をとりあげ、“之”に後接する中心語の音節数から、日本語の漢文訓読体文章から中国語訳文への影響を確認したい。

1 “之”の韻律的特徴に関する先行研究

“之”の文法的役割に関する先行研究は“之”の構造形式、文法的機能、方言、“之X”構造の語彙化変遷、“之”を含める四字格の韻律構造など多岐にわたっている。そのうち連体修飾フレーズにおける“之”は修飾語と中心語を接続し、修飾語と中心語の関係を明確にする機能を果たすとされる。“之”の韻律的特徴に関する研究は、古代中国語の“之”の場合、主述構造“之”を対象とするものが多い。例えば、

刑之不濫，君之明也，臣之愿也。（《左传・僖公二十三年》）

馬建忠（1898: 248）は“然且加‘之’者，所以四之耳”と述べる。“四之”、即ち音節を補足することで“之”の構造を四音節にすることと理解してもよからう。馮勝利、施春宏（2018: 18）は、“之”は“填充或实现主谓之间的边界停顿”と述べる。陳遠秀（2020）も“‘之’通过填补音节，帮助其所在结构构成整齐的韵律形式，因而为整体结构带来正式性（甚至庄严性）”と述べる。よって、“之”に関する研

究は、文法的機能のみならず、韻律的性質にも考察する余地があると考えられる。

ほかに、何樂士（1989: 58）は《左传》における“X之名”とう定中構造を対象に統計を取り、偶数音節の“X之名”の数が大幅に単数音節の“X之名”を上回った結果に対し、これは《马氏文通校注》（1961: 314）が言及した中国語の音節偶数化現象を裏付けたと認めた。以上の観点をまとめれば、主述構造の“之”のみならず、定中構造“X之名”においても“之”の韻律的特徴が見られると考える。

一方、現代中国語に使われる“之”を“的”と対照に、呂叔湘（1999: 673）は以下のように述べる。

用法大致与现代“的”字相当。但有些场合只能用“之”；有些场合虽然也常用“的”，但习惯上也往往用“之”。用“之”的词语如果改用“的”，往往要调整音节，把“之”后边的单音节改为双音节（呂叔湘 1999: 673)²⁾。

また張誼生（2000: 205）は現代中国語における“之”について以下のように論じる。

结构助词“之”带有明显的书面语色彩，主要用在定中短语中，偶尔也可以用在主谓短语、数词短语和状中短语之中。“之”用于定中短语中时，大都要求定语是双音节的，而中心语是单音节的。“之”后中心语可以是名词或谓词（張誼生 2000: 205）。

さらに、馮勝利は“韵律制约的文白交错律”という規則を説明する中で以下の例を挙げた。

北京的春天 *北京的春³⁾

北京之春 *北京之春天（馮勝利 2005: 506）

馮勝利によれば、“的”と“之”の用法は補い合う関係を持っている。“北京的春”“北京之春天”というような表現は語呂がよくないのは、“的”と“之”が助詞として異なる韻律性質を持っているからである。具体的にこのように述べている。

今天的“的”是一个前附助词，而古代的“之”则是一个后附助词。均为助词，但其韵律性质不同。此其一。第二，“的”字轻读，但“之”不能轻（古代可以，但不能以古律今）。因此，就韵律结构而言，“北京的春”是“（（北京的）春）”，“春”字孤身殿后，韵律失衡，所以不上口。而“北京之春天”的韵律结构是“（（北京）（之（春天）））”，“之”不轻，于是和“春天”组成一个“超音步”。如前所述，古语必双而后独立（韵律词），显然〔之（春天）〕有违规则（非标准韵律词），故不上口（馮

2) 現代中国語“的”に相当するとはいうものの、“之”しか使えない場合もあれば、“的”を使うのがよく見られるが習慣として“之”を使う場合もある。“之”を“的”に変換すると、往々にして語彙の音節を調整し、“之”に後接する単音節を二音節に変える必要がある。

3) 「*」は非文あるいは不自然な文であることを表わす。以下同じ。

勝利2005: 506)。

よって、馮勝利は韻律語法理論を踏まえ、“口耳是书面语体合法与否的一大原则”（韻律は書き言葉の妥当性をはかる大原則）という結論を得た。

後に、劉旭鵬（2014）は、北京大学 CCL コーパスおよび先行研究の用例を基本資料とし、現代中国語と古代中国語の“之”に後接した一音節語・二音節語・多音節語の中心語の使用頻度を統計することによって、現代中国語も古代中国語も、一音節中心語が連体修飾マーカー“之”に後接する例が圧倒的に多く、その次がそれぞれ二音節中心語、多音節中心語となる。“之”に後接した二音節中心語はある程度の割合を占めているが、多音節中心語の使用例がごく少ないという結論を得た。ただし、劉旭鵬は、“的”と“之”は同様に定中構造と主述構造に使われることが可能なので、この二種類の構造を漠然と連体修飾フレーズとみなす。即ち“集体的力量”“百万之师”のような定中構造のみならず、“敌人的重重封锁”“鞠人、谋人之保居”のような主述構造も統計対象とする。以下、劉旭鵬が統計したデータを挙げる（テキスト部分は筆者より翻訳）。

表1 現代中国語の“之”に後接する中心語の音節数

“之”に接続した 中心語の音節数	出現頻度	割合
一音節	883	94.30%
二音節	44	4.70%
多音節	9	1.00%
合計	936	

表2 古代中国語の“之”に後接する中心語の音節数

“之”に接続した 中心語の音節数	出現頻度	割合
一音節	743	82.20%
二音節	140	15.50%
多音節	21	2.30%
合計	904	

二音節語彙の割合に注目すれば、現代より古代の方が明らかに多いのがやはり馮勝利の観点を裏付けたのかもしれない。また、同論文のまとめによれば、“之”と組み合わせた二音節中心語は古代から使われた二音節語でなければならない。現代中国語の二音節語が中心語として“之”に後接する場合、書き言葉であることとともに中心語を強調する役割を果たすのに使われるという制限がある。“之”と組み合わせた多音節中心語は構造が多様とはいうものの、用例は少ない。多音節中心語が組み合わせた現象に対し、劉旭鵬は以下のように明らかにしている。

主要是由于文言助词“之”越界混入白话而构成的，也就是说，通过观察，我们认为定中标记

“之”与多音节中心语的组合主要出现在“非白不文”的文体中，即古汉向现汉的过渡文体中（劉旭鵬 2014: 22）。

つまり、“之”と“的”はそれぞれ機能を分担して以降、“之”は特定な場合や文体にのみ使われるようになった。加えて、“之”は中心語を強調する役割を果たすので、多音節中心語は一音節を主とする古代中国語にも二音節語を主とする現代中国語にも適用せず、過渡的文体（文言から白話への転換期）のほうが多いように思われると分析した。

2 《佳人奇遇》における連体修飾マーカ―“之”

それでは日本の漢文訓読体文章から翻訳された《佳人奇遇》では“之”の振る舞いはどのようになっているのだろうか。《佳人奇遇》の訳文文体に対し、胡全章（2020: 157）は同じ文言文体として嚴復と林紓の翻訳文体と明らかに異なるところがあり、日本語借用語の新しい名詞および欧化文法の混用がその特徴として、《佳人奇遇》が改良的文言であることを裏付けたのかもしれない、という見方を示した。改良的文言が過渡的文体の一つであり、かつ改良的要素は翻訳に由来するものであると考えられる。前節で連体修飾マーカ―“之”に後接した中心語がどれだけの音節数を有しているのか、その音節ごとの出現頻度および“之”が二音節と多音節の中心語を伴うための条件を確認したが、以下で《佳人奇遇》における連体修飾フレーズの“之”が使われる状況を考察する。そのうえで先行研究で論じられた“之”の使用状況と比較し、“之”の連体修飾フレーズの用法が改良的要素を含むのか否かを明らかにしたい。

本論文ではさしあたり《佳人奇遇》の第二巻までの連体修飾フレーズ“之”を考察対象とする。また、劉旭鵬（2014）の統計結果と比較する便から、本論文もいったん定中構造と主述構造における“之”を同様に「連体修飾マーカ―」とみなし、考察対象とする。

なお本論文の統計対象は漢文訓読体の原文『佳人之奇遇』にある程度影響されるものとする。漢文訓読体とは漢文を訓読法で書き下した文体と定義されており、そもそも漢文に影響された文体であり、テキストの全体からして漢字の使用量はかなり多い。ただし、漢文訓読体は書き下ろし文と相違点があるとされる。古田島洋介（2013: 16-29）のまとめによれば「漢文意識希薄化現象」「和文要素混入現象」などといった特徴がある。これらの特徴が訳文《佳人奇遇》に与えた影響は漢語語彙からうかがえると考え、原文“之”⁴⁾に後接する中心語の音節数と同様のものを統計の対象にする⁵⁾。原文『佳人之奇遇』に影響されるものと判断する具体的基準は以下の(1)–(3)の3種である。

(1) 「和文漢読法」⁶⁾に沿って翻訳されたもの

4) 漢文訓読体の場合、ほとんど「ノ」で表記されるが、詩など特定の場合にしか“之”と表記しない。

5) 原文に“之”がないが、訳文に連体修飾マーカ―“之”を使う例もある。例えば「威名赫赫文物粲然タル大英國」を“威名赫赫文物粲然之大英國”と訳されている。中心語は原文のまま使うのはたしょう影響があるとは判定できるものの、それに相応する原文が連体修飾フレーズではないため、厳密上統計の対象としない。

6) 「和文漢読法」とは梁啓超は日本の漢文訓読法を逆転させたものである。本論文で漠然と「和文漢読法」と称するが、梁啓超の「和文漢読法」に関わらない。

原文：髣髴トシテ輕雲ノ新月ヲ蔽フカ如ク…⁷⁾

訳文：髣髴如輕雲之蔽新月⁸⁾

- (2) 言葉遣いをいささか変更するもの

原文：然レ凡氏我人民ハ女皇ノ不徳ヲ惡ミ…

訳文：凡我人民惡女皇之無道

- (3) 原文の語彙をそのまま使うもの

原文：胸懷無限ノ憂鬱ヲ散スルヲ得ント…

訳文：可散胸無限之憂鬱

以下のような音節数が原文と訳文の間で異なる例は分析対象外とする。

原文：是興亞ノ端緒ナルヘシト…

訳文：是可為興亞之第一策

まとめた結果、“之”の連体修飾フレーズが原文に影響されていないと判定するものがわずかに13例しかない。このデータは《佳人奇遇》が原文の言葉遣いからの影響を裏付けたといってもよからう。

以下、《佳人奇遇》における“之”の連体修飾フレーズの中心語音節数分布を挙げる。

表3 《佳人奇遇》の“之”に後接する中心語の音節数

“之”に接続した 中心語の音節数	出現頻度	割合
一音節	223	44.60%
二音節	258	51.60%
多音節	19	3.80%
合計	500	

上表によると《佳人奇遇》における連体修飾マーカー“之”は先行研究と異なる傾向が見られる。第一に、一音節中心語の割合が優位性を失い、かえって二音節中心語の用例数が上回るという現象が存在する。これは前述の先行研究がまとめた“之”に後接した中心語は一音節を主とするという一般的なルールとは異なる結果である。第二に、二音節中心語の語彙の種類に着目すると古代から使われつつある語彙があるのはもちろん、“破鐘”“衣裳”“松樹”“扁額”“長篇”“景色”“一家”“蹤跡”などやや口語的な表現も“之”に後続する中心語となる。“之”は助詞として現代までにも使われており、その文言的特徴が依然として保存されているが、口語的な中心語語彙に後続すると、やはり文体が“非白不文”（白話でも文言でもないもの）になってしまうと言わざるをえない。第三に、“之”に後続した中心語は古典

7) 漢字表記は1886年博文堂より出版された『佳人之奇遇』に準ずる。

8) 漢字表記は1947年中華書局より出版された《佳人奇遇》に準ずる。

語彙にとどまらず、“政略”“幸福”“王子”“人民”“独立閣”“自由”“政策”“外交政略”“政權”“政党”“交通”“富強文明”など近代の新語も含んでいる。これらの新語はいずれも柴四朗著『佳人之奇遇』における語彙をありのまま訳文に借用したものであり、古代から現代への過渡的特徴が多少反映されている。

翻訳を通じて中国語が日本語の複音節語彙を夥しく取り入れたことは言うまでもないが、“之”に後接する中心語に関する統計は表1～表3によって明らかにした。『佳人之奇遇』など漢文調文章の翻訳は間接的に近代中国語の書き言葉における“之”の連体修飾フレーズの韻律を崩し、中国語に新たな表現をもたらしたものと考えられる。

3 《佳人奇遇》と《新民説》の比較

《佳人奇遇》における“之”の連体修飾フレーズの新たな特徴があくまで翻訳の側面にとどまるか、はたまた近代中国語の文体にも影響を及ぼしたのかについて、次に梁啓超《新民説》⁹⁾を例として考察してみたい。そこで《新民説》の冒頭から500の“之”が使われた連体修飾フレーズについて統計をとった。その結果は以下である。

表4 《新民説》の“之”に後接する中心語の音節数

“之”に接続した 中心語の音節数	出現頻度	割合
一音節	156	31.20%
二音節	232	46.40%
多音節	112	22.40%
合計	500	

表4によれば、《新民説》における“之”の連体修飾フレーズは二音節中心語の出現回数の割合が《佳人奇遇》ほど多くはなく、一音節中心語を上回っているという現象が観られる。二音節中心語の割合に着目すると、《佳人奇遇》は51.60%であるのに対し、《新民説》は46.40%である。《新民説》においては二音節中心語に“事件”“制度”“政治”“警句”“潮流”“侵略”“資格”“道德”“机关”“权利”“性质”“本体”などの二音節名詞のほか、動詞句とも見なされる“附臚”“向的”“立教”“汨涌”“为物”などが挙げられる。また、《新民説》における多音節中心語の割合が22.40%となり、表1（1.00%）、表2（2.30%）、表3（3.80%）の統計よりはるかに割合が多くなるのは、二音節中心語と同様に主述構造が多用されるのが原因であるとともに、“政府官吏”“文明程度低者”“帝国主义”“专制政府”“罗马帝国”“事务所”“最高潮”などといった複音節名詞も少なくないのも一因と考えられる。

9) 呂順長（2016）は《佳人奇遇》の梁啓超訳説を有力な論拠でもって否定し、梁啓超がただ『佳人之奇遇』の翻訳と連載に対して、序言を書いたり、場合によって訳文の添削と潤色をしたりして側面から支援したのではないかと結論づけている。本研究は梁啓超訳の真偽を扱わず、いずれにせよ、梁啓超がある程度『佳人之奇遇』の翻訳に携わり、《和文漢讀法》まで編纂したなどといった事実からして、梁啓超が『佳人之奇遇』を代表とした漢文調文章の日本語に影響されたことが否定できないということを踏まえ、《新民説》を考察対象にする。

劉旭鵬の統計をもとに、《佳人奇遇》および《新民説》の統計をまとめて比べれば以下の図となる。

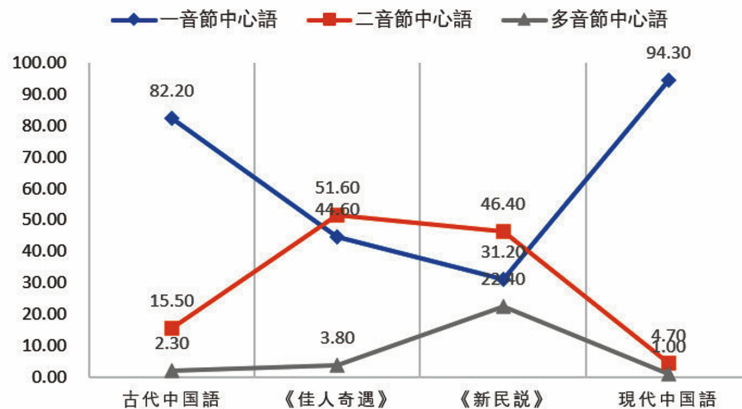


図1 “之”に後接した各音節数中心語の分布

“之”に後接する中心語音節数の変遷は、全体からすれば、古代と現代はほぼ同様に一音節中心語が優位性を保っており、その次に二音節中心語、多音節中心語という順位となっているにもかかわらず、《佳人奇遇》というような翻訳作品は《新民説》に多少影響を与えたものが見られる。とりわけ一音節中心語において、《佳人奇遇》での出現回数は比較的に低い、《新民説》においてそれより低い出現回数となっている。さらに、二音節中心語において、《佳人奇遇》での出現回数をもっとも多いが、《新民説》において相対的に多い現象となる。多音節中心語は主として多音節名詞や主述構造における複音節動詞的名詞と二種類があるので、《佳人奇遇》や《新民説》でも同様に多用されている。特に《新民説》の場合、改良的文言として主述構造の“之”に多音節中心語が後接する例がほとんどである。改良的文言が上古から使われていた主述構造の用法を受け継ぐとともに、時代の革新に応じた複音節名詞も取り入れるという特徴が窺えるであろう。

おわりに

本論文は「欧化」から細分化した「日化」を切り離し、および日本語が直接に中国語に与えた影響をそれぞれ分析した。日本語の中国語に対する文法面での影響について翻訳作品《佳人奇遇》および改良的文言とされる《新民説》を例とし、連体修飾マーカ―“之”に後続する中心語の音節数について、その量的変化を計量的に分析した。その結果、《新民説》は《佳人奇遇》と同様に一音節中心語の優位性を失い、二音節中心語が相当の割合を占めていることを明らかにした。これは翻訳を通じて日本語が中国語に与えた影響は借用語などの語彙にとどまらず、文法にも及んでいることを実証的に裏付ける形となる。ただこうした現象は用例数をカウントした古代中国語にも現代中国語にもないので、翻訳作品および改良的文言を代表とする過渡的文体にしか存在しないかもしれない。

また、多音節中心語について主述構造の“之”が多用されている。王力(1980: 460)によれば、主述構造の“之”は上古から使われていたが、中古以降、口語で地位を徐々に失い、“的”(“底”)に代替さ

れるようになり、五四運動以降主に英語の影響を受けて再び使われるようになった。ただ、明治期の日本語作品の翻訳を通じて再び漢文調の文章に触れたり、改良運動に応じて文言文体を改良したりすることで、主述構造の“之”を使わざるを得なかった状況もある可能性が考えられる。

本論文が《佳人奇遇》および《新民説》における連体修飾マーカー“之”に対して計量的に考察した範囲は冒頭の500例にすぎないので、いまだ初歩的な結論にとどまっていると言わざるを得ない。また梁啓超の“新民体”文体の影響が民国以降にも及んだとされていることを踏まえ、《新民説》以降の文章にも考察対象として検討の余地があると考えられる。さらに、本論文は先行研究との比較の便宜から“之”の定中構造と主述構造を連体修飾フレーズとみなしているが、近代の文章語における主述構造の“之”が盛んに使われるのが「欧化」、「日化」のいずれなのか、それとも単に中国語における固有の用法がいったん衰えるも、改良運動によって再び活性化する現象なのかは、改めて検討したい。

参考文献リスト

[日本語]

- さねとう・けいしゅう（1970）『中国人日本留学史（増補版）』東京：くろしお出版。
 古田島洋介（2013）『日本近代史を学ぶための文語文入門：漢文訓読体の地平』東京：吉川弘文館。
 呂順長（2016）「政治小説『佳人奇遇』の『梁啓超訳』説をめぐって」『衝突と融合の東アジア文化史』、勉誠出版：144-156。

[中国語]

- 陳彪（2017）「現代漢語“日化”現象研究」博士学位論文，華東師範大学対外漢語学院。
 陳力衛（2005）「日語新漢語詞の産生與近代漢文訓讀的關係」石塚晴通（編）『敦煌學・日本學——石塚晴通教授退職記念論文集』上海：上海辭書出版社：320-332。
 陳遠秀（2020）「“主之謂”之“之”的韻律属性、功能及語体特徴」『韻律語法研究』2：162-184。
 馮勝利（2005）『漢語韻律語法研究』北京：北京大学出版社。
 刁晏斌（2019）「漢語的欧化与欧化的漢語——百年漢語歷史回顧之一」『雲南師範大学学报（社会科学版）』51（01）。
 馮勝利、施春宏（2018）「從語言的不同層面看語体語法的系統性」馮勝利、施春宏（編）『漢語語体語法新探』上海：中西書局：4-38。
 何樂士（1898）『《左傳》虚詞研究』北京：商務印書館。
 賀陽（2008）『現代漢語欧化語法現象研究』北京：商務印書館。
 胡全章（2020）「梁啓超与晚清文学翻譯」『文学評論』3：151-159。
 胡全章・関愛和（2018）「晚清与“五四”：从改良文言到改良白話」『中国社会科学』9：158-175+207-208。
 李春陽（2014）「漢語欧化的百年功過」『社会科学論壇』（12）。
 劉興忠（2021）「漢語異質文言的欧化特征——梁啓超“新文体”語法現象為例」『北華大学学报』（社会科学版）3：33-43+150-151。
 劉旭鵬（2014）『定中標記“的”与“之”的韻律効應對比探析』修士學位論文，華中師範大学文學院。
 呂叔湘（1999）『現代漢語八百詞』（增訂本）北京：商務印書館。
 馬建忠（1898）『馬氏文通』北京：商務印書館。
 沈国威（2011）「現代漢語“欧化語法現象”中的日語因素問題」『東アジア文化交渉研究 別冊』7：141-150。
 王力（1943）『中国現代語法』北京：商務印書館。
 王力（1984）『中国語法理論』（王力文集第一卷）濟南：山東教育出版社。

- 王力 (1985) 『中国現代語法』 北京：商務印書館.
- 王力 (2004) 『漢語史稿』 北京：中華書局.
- 王奇生 (2008) 「民国時期的日書漢譯」 『近代史研究』 6: 45-63+ 2-3.
- 謝明鏡 (2015) 「外来詞的“漢化”和漢語詞的“外化”研究」 『北華大學學報 (社會科學版)』 16 (03).
- 徐時儀 (2018) 「語言接觸與漢語文白轉型探論」 『南陽師範學院學報』 17 (05).
- 章錫琛 (1961) 『馬氏文通校注 (下)』 北京：商務印書館.
- 張誼生 (2000) 『現代漢語虛詞』 上海：華東師範大學出版社.
- 周光慶 (2001) 『漢語與中國早期現代化思潮』 哈爾濱：黑龍江教育出版社.